



デモには浅田ほか藤野前議員、デヴィ夫人も参加した

いまも一日一十頭以上の犬や猫が、苦しみながら天に消えている——。浅田美代子が救った1頭の犬の命が、彼女を「動物愛護」の活動へと、大きく動かした。

「母が亡くなったとき、愛犬たちが私の支えになってくれたんです。それが、このデモに参加するきっかけでした」

女優の浅田美代子(55)は、動物愛護のデモに参加した理由をそう答えた。500人ものデモ行進の先頭を歩きながら、声を張り上げている姿は、いつもテレビで見える明るい表情とは少し違い、いくぶん、憂いを含んでいた。

「生後8週目以下の赤ちゃんペットを親から引き離すことをやめよう!」「ペットの深夜販売をやめよう!」



渋谷駅周辺を約40分かけて法改正を訴えた

2月26日午後2時半、第1回となる「日本動物虐待防止協会」デモが東京の代々木公園からスタートした。環境省では平成24年度に向け、動物愛護法改正への本格的な検討が始まっている。この5年に1度の法改正に照準を合わせ、「動物愛護管理法を見直す会」(藤村晃子代表)では、動物の命を守るための法改正を呼びかけている。日本では、年間約28万頭の犬や猫たちが、全国106の収容施設で二酸化炭素ガスによる殺処分をされている。「でも、それは収容施設で処分される犬たちだけの数です。たとえばペットショップの

売れ残りの犬とか、悪徳ブリーダーが使えなくなった繁殖犬とかも、それぞれ人知れず処分されているそうです。それを合わせるとすごい数になっていくと思います」

デモを終えて、浅田は本誌のインタビューに答えた。これまで同会で集めた署名は約4万人。なかでも浅田は率先して著名人も含めた多くの署名を集めた。私物でのチャリティオークションの売り上げ20万円は、7団体へ寄付された。

「いただいた署名は数千人に なります。TBSの『さんまのスーパーからくりTV』の仲間の関根勲さんや長嶋一茂さん、明石家さんまさんも署名に応じてくれました」

小さいころから犬を飼っていたという浅田。その存在の大きさを感じたのは、冒頭の言葉のとおり、10年前に母親を亡くしたときだった。

「ずっと一緒に住んでいた母を急性白血病で突然に亡くしたときの事です。もう一歩も外に出たくないとか、仕事もしたくないとか引きこもりになりそうになりました。」

でも、そんなときも、犬たちにはご飯をあげ、1日2回

の散歩も、行かないやいけないですからね……」

そんな普段どおりの生活を重ねるうちに……。「最初は嫌々でも外に出ていくうちに、季節が変わって行くのを感じたりとか。それに話しかける存在がいることですごく救われました。」

私は独身だったし、自分もこういう年齢になって、犬たちがいなくなったら、引きこもりになっていたかも……」

浅田は21歳で結婚した後、27歳で離婚。その後は実母と2人暮らしだった。愛犬とともに悲しみに耐えた日々を思い出したのか、浅田の目に涙がたまっていた。

「子犬は虐待で人間恐怖症に——」

その後、小さな保護団体から推定5歳の成犬を引き取ったのが2年前のことだ。「新しい犬を飼うことは決まていました。」

ですが、新しい子犬をペットショップから買うよりも、かわいそうな子がいっぱいいると聞いたので、サイトを見たりして探したんです」

その犬は保護団体から、アヴィという名前がつけられていた。「仮の名前でしたが、1週間でも2週間でもその名で呼ば



アヴィちゃんの誕生日は、引き取った日の5月15日に

れていたら、名前を変えるほうがストレスになるはず。それより、虐待を受けていたのが人間恐怖症を治してあげるこのほうが大事だと思ったので、そのまま「アヴィちゃん」と呼んでいます」

アヴィちゃんが、浅田家の一員となった当初、それはひどい状態だった。「毛もボロボロで、歯も折れていましたね。抱こうとしても逃げて、ケージの中でおびえていました。お腹にきつくヒモで縛られたような痕もありました。」

虐待を受けていたせいかわれが怖がって、ご飯に呼んでも来ませんでした。野良猫にあげるように、食器だけ置いて、そうつと離れて見ていると、サツと来て、カカツと食べてケージに隠れていましたね」

4月15日 11.3.29